

バードリサーチ ニュース

2007年5月号 Vol.4 No.5



Hirundo rustica
Photo by Uchida Hiroshi

参加型調査

今年もヒクイナ調査に ご協力ください!

平野 敏明

1. レッドリスト 絶滅危惧Ⅱ類(VU)に選定

ヒクイナは、湿地の草むらに生息するクイナの仲間です。日本ではもともと身近な鳥で、その鳴声は「クイナの叩き」として親しまれていました。しかし、近年は生息数が減ってしまい、その鳴き声もかつてのように聞くことができなくなっています。昨年12月に発表された環境省のレッドリストの改訂版では、新たに絶滅危惧Ⅱ類(VU)に選定されました。



写真. 水田を歩くヒクイナ。
[Photo by 内田博]

2. 2006年の調査結果

バードリサーチでは、いち早く昨年から全国のヒクイナの生息状況を調査しています。その結果は、バードリサーチニュース 2006年10月号に結果速報として報告しましたが、その後さらに6人の方から情報が寄せられました。昨年5月から8月までに全国で9人の方が合計26か所で鳴声再生による現地調査を実施していただきました。また、10人の方にはアンケートにお答えいただきました。その結果、現地調査とアンケートによる情報から、2006年の繁殖期にはヒクイナは20か所で少なくとも32羽(個体数の記載がないものは1羽として計算)の生息が確認されました(図1)。

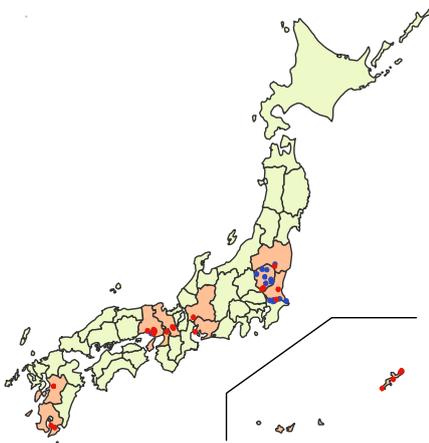


図1. 2006年の繁殖期にヒクイナの生息が確認された地域(赤丸●)と確認できなかった地域(青丸●)。

ヒクイナが生息していた環境は、水田や河川、池沼の湿地状の草むらで、草丈がせいぜい1.5mの植物が生育し、地表に20cm以下の深さで水が覆っている環境でした。生息が確認された府県は、福島県、栃木県、茨城県、岐阜県、愛知県、京都府、大阪府、兵庫県、熊本県、鹿児島県、沖縄県の2府9県です。図1をみると西日本に生息地が多いことがわかります。ただ、四国地方や中国地方、九州北部からはまったく情報がありません。これらの地域には、ヒクイナは生息していないのでしょうか、それとも単に情報がないだけなのでしょう。

3. 調査への参加とアンケート!

バードリサーチでは今年も引き続きヒクイナ調査を行ないます。興味のある方は、ぜひ、ご協力ください。

実際に野外で鳴声を再生して調査を行なっていただける方は、調査に必要なテープまたはCD(MD)をお送りいたします。バードリサーチ(hirano@bird-research.jp)までご連絡ください。

また、探鳥に行ったらたまたまヒクイナの生息を確認したという記録のほか、ヒクイナがいそうな環境に早朝によく出かけるのに生息を確認していないといった不在情報でも結構です。ホームページのアンケート(図2)にお答えください。調査方法やアンケートについては参考ホームページのヒクイナ調査をご覧ください。

なお、繁殖期の記録だけでなく、冬の記録でも結構です。以前は夏鳥と考えられていましたが、現在では主に西日本で冬期も生息していることが分かっています。昨年のアンケート調査でも越冬記録をお送りいただいたものがありました。越冬する個体が日本のどの辺までいるのか、多いのか少ないのかなども興味深いテーマです。

4. 参考ホームページ

バードリサーチ プロジェクト紹介-ヒクイナ調査-
http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_hikuina.html

生物多様性情報システム 絶滅危惧種情報
http://www.biodic.go.jp/rdb/rdb_f.html



図2. ヒクイナの記録は簡単なアンケートに答えるだけでOK。

http://www.bird-research.jp/1_katsudo/index_hikuina_question.html

活動報告

ミヤマガラスの個体数の季節変動調査 ～群れの国内移動を見い出せるか？～ 高木 憲太郎

1. 調査地と調査方法

2006年11月号にミヤマガラスの初認調査の結果のご報告をしましたが、この冬は別の調査も平行して実施しました。こちらの調査の目的は、各地のミヤマガラスの個体数変化から、国内での移動状況を見い出そうというものです。初認調査に協力してくださっている方に声をかけ、北海道から九州にかけての13か所の調査地を選びました(図1)。参加していただいた皆さま、ありがとうございました。



図1. 調査地の分布.

調査は、およそ10km四方のひとつながりの水田地帯を1つの調査地として、その中をくまなく自動車等で走り回り、調査地内で日中に採食しているミヤマガラスの個体数をカウントするという方法です。2006年10月から2007年4月にかけて、11か所の主要な調査地では10回、2か所の調査地では5回の調査を実施しました。結果をまとめましたので、ご報告します。

2. 12月に各地で個体数が減少？！

多くの調査地では11月下半期まで個体数が増加しました(図2)。このことから、この頃まで渡りが続いていたと考えられます。その後、日本海に面したの秋田県の八郎潟、石川県の河北潟、島根県の斐伊川の調査地では個体数が減少しました。この時期に逆に増加した調査地があれば、そこへの移動が予想されるわけですが、日本海側以外の地域で12月以降に10、11月と比較して顕著な増加が見られたのは京都府の巨椋干拓だけでした。

日本海側で個体数が減少し始めた12月には、宮城県の仙台や京都府の巨椋干拓、宮崎県の一ツ瀬川でも個体数が減少しました。しかし、この3つの調査地では日本海側と違って、減少したのは12月だけで翌月には個体数がもとに戻っています。では、12月にミヤマガラスはどこに行ってしまったのでしょうか？

関東平野の小山と菅蒲では10、11月に比べて1月は少し個体数が増加していましたが、それもわずかです。愛媛県の西条では3月に1度個体数が増加していますが、時期的

に遅く、渡りの時期にさしかかっているのに、別の要因ではないかと思えます。グラフを見て目につくのは、福岡県の津屋崎です。1、2月になってから個体数の顕著な増加が見られていますが、これは津屋崎が春の渡りの前に集結する場所だったためかもしれません。

12月の減少は日本海側から太平洋側というような大きな移動ではなく、調査地の周辺に分散しただけなのかもしれません。原因には餌の減少も考えられますが、3つの調査地では、1月以降個体数がもとに戻っているの、餌が完全になくなってしまったというわけでもなさそうです。

皆さんのフィールドのミヤマガラスはどうだったでしょうか？ 昨年(2006年)の12月に、いつもはいないところで群れを見た、または、個体数が増えていたようだという情報をお持ちの方は、ぜひ高木 (takagi@bird-research.jp)までお知らせください。

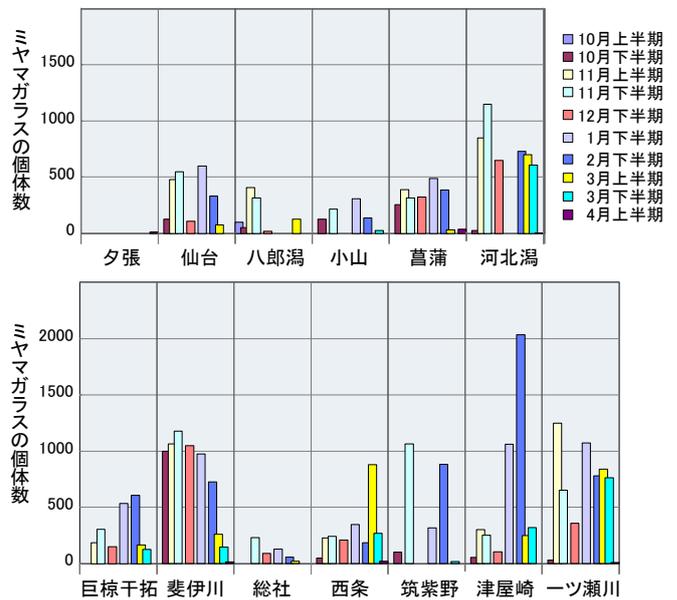


図2. 各調査地のミヤマガラスの個体数の季節変化.

3. 若鳥はのんびりやさん？

今回の調査では、ミヤマガラスの個体数を調査する際に、群れの一部をピックアップして成鳥と若鳥を識別して記録しました(図3)。すると、菅蒲や斐伊川、福岡県の筑紫野の調査地で季節が進むにつれて成鳥の比率が増加する傾向がありました。これらの調査地は、個体数が徐々に増加するというような傾向はなかったもので、単純に成鳥が加入して比率が高まったわけではなさそうです。

3月以降になると、多くの調査地で成鳥の比率が低下しました。繁殖する気満々の成鳥は早く繁殖地に向かうけれど、若鳥はそれほど急いでいないのか、餌を探すのが下手で冬の間十分に栄養を蓄えられていないので、頑張つて最後まで採食しているのでしょうか？

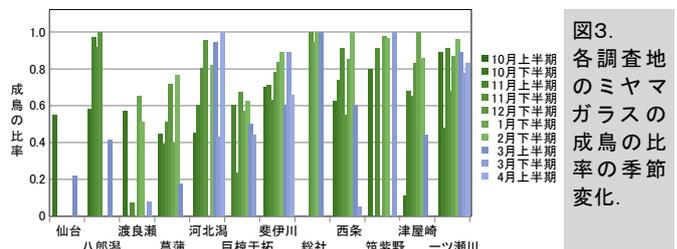


図3. 各調査地のミヤマガラスの成鳥の比率の季節変化.

写真
群れで採食する
ミヤマガラス.



参加型調査

フィールドノート 簡単化計画第3弾
～チェックリストで入力できます！～
神山 和夫 バードリサーチ嘱託研究員

今月もフィールドノートの簡単化が進んだのでお知らせいたします。今回は、チェックリスト形式で野鳥記録を入力できるようになりました。キーボードから種名を入力しなくても、マウスだけの操作で簡単にフィールドノートに記録を保存できます。

種名リストは五十音順と図鑑順(同じ環境の鳥を1画面にまとめたので日本鳥学会発行の日本鳥類目録の分類順と少し順序が違います)の2つを用意しました。この2つのリストはボタンで画面を切り替えることができます。そして、観察した種の名前をチェックすれば、フィールドノートに記録が保存されます。ぜひ一度、使ってみてください。



図. フィールドノートのチェックリストの画面。

冬鳥ウォッチ結果速報
対象6種全てが記録されました！
平野 敏明

ゴールデンウィークが過ぎて、名残り惜しそうに群れているツグミもいつの間にか姿が見られなくなりました。皆さんのまわりの、今年の冬鳥の状況は如何だったでしょうか。さて、冬鳥の渡来状況をモニタリングするために、この冬からスタートさせた冬鳥ウォッチの結果を簡単にご報告します。

4月20日までに合計11人の方から20件の情報をお寄せいただきました。都道府県別では、北海道、宮城県、東京都、長野県、富山県、滋賀県、徳島県から各1件、千葉県と神奈川県各2件、栃木県8件でした。件数が伸びなかったのは、調査方法がやや漠然としていて捉えどころがなかったためでしょうか？それでも、今冬は調査対象とした6種すべてが記録されました。カシラダカとカワラヒワが多く12件と13件、その他は数件のみでした。50羽以上の群れが記録されたのは、カシラダカとハギマシコ、カワラヒワでした(図)。野帳に冬鳥の記録がある方は、今からでも遅くありません。ぜひ、ホームページからご報告ください。

なお、今回集まった記録の中に、ウソが例年よりも多いという報告が4件ありました。実際、関東では平野部のちょっとした公園のツツジの植え込みや桜の木に群れが観察されました。来年以降はウソなど今回調査対象としなかった鳥たちも調査対象に加える必要があるのかもしれない。今年の冬に向けて検討したいと思います。

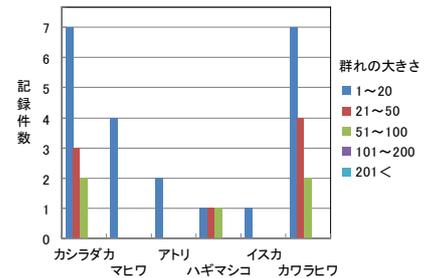


図. 群れサイズごとの記録件数。

図書紹介

保全鳥類学

山岸哲監修 (財)山階鳥類研究所編集/京都大学学術出版会 定価 3500円(税別)

山階鳥類研究所から保全鳥類学という本が出版されました。書評を書こうと思って何日か持ち歩いて電車などで読んだのですが、中身は16章に分かれていて、それぞれが20~30ページにまとまっていたので読みやすく、つい夢中で読んでいて2回も電車から降り損ねてしまいました。

保全の対象となる“種”とはいったいなんなのか?といった基本から、DNAによる遺伝的多様性の解析、ラジオトラッキングや衛星追跡といった保全対象鳥類の生態を調査するためのテクニック、絶滅の危機に面している鳥種にスポットをあてた話、ひとつの種ではなく群集や生態系の保全ついでの話、重金属や重油など人間による環境汚染の影響、最近毎年のようにニュースになる感染症など、鳥類の保全にかかわる広い分野が網羅されています。どれもそれぞれ

の分野の第一線で活躍している研究者が執筆していて、背景となる鳥の生態や研究成果を踏まえて書かれているので、保全分野に限らず、とても面白く読めます。ちょっと難しいなあ、と思うところがあっても、下手に入門書を買うよりもこの本を買って読んで、わからないところはそれぞれの分野の入門書を図書館で…、というのが僕のおすすめです。

【高木憲太郎】



サシバ 英: Grey-faced Buzzard 学: *Bufo indicus*

1. 分類と形態

分類: タカ目 タカ科

全長: ♂ 405.5mm (381-431) N=20 ♀ 409.8mm (400-415) N=6
 自然翼長: ♂ 327.3mm (290-330) N=20 ♀ 339.5mm (313-355) N=6
 尾長: ♂ 195.1mm (181-216) N=20 ♀ 198.0mm (195-201) N=6
 露出嘴峰長: ♂ 26.7mm (19-29) N=20 ♀ 25.8mm (21-28) N=6
 ふ蹠長: ♂ 60.1mm (56-66) N=19 ♀ 60.6mm (51-68) N=6
 体重: ♂ 431.3g (390-500) N=20 ♀ 491g (430-575) N=5
 ※ 東による千葉県、沖縄県での成鳥の計測値。ただし体重は千葉県のみ。

羽色:

雌雄ほぼ同色。成鳥は頭頸部と体の上面および翼上面は赤みのある褐色で、顔が灰色、喉に太い縦線が1本あり、胸が褐色または暗褐色で、腹に褐色または暗褐色の横帯がある。尾は灰褐色で、暗褐色の横帯が4本ある。虹彩は金色である。幼鳥は上面に赤みが少なく、前頸から腹にかけて暗褐色の縦斑があり、顔と目は褐色で、バフ色の顕著な眉斑がある。まれに、ほぼ全身が暗褐色の暗色形が出現する。飛行中の翼は細く、先がとがる。晴天時には風切羽が透けたように見え、羽に厚みがない。見間違いやすいオオタカやノスリに比べ、胴体は細い。また、小刻みにゆっくり羽ばたき、直線的に飛ぶ。



写真1. サシバの親鳥とヒナ。
[Photo by 内田博]

鳴き声:

雌雄とも「ピッキーン」とか「キンミー」と聞こえる声でよく鳴く。越冬地や渡りの途中など繁殖期以外でも、この声で鳴くことがある。警戒声も同様である。

2. 分布と生息環境

分布:

アムール地方南部、ウスリー地方、中国東北地方から河北省にかけて、それに日本の東北地方から九州で繁殖する。国内では、北は秋田・岩手県で毎年繁殖が確認されているが、青森県では継続的な繁殖は確認されていない。また、南は種子島まで、沖縄県を除く全都府県で繁殖が確認されている。冬期は南西諸島、台湾、中国南部、ミャンマー(ビルマ)、インドシナ、マレー半島、フィリピン、ボルネオ、スラウェシ(セレベス)、マルク(モルッカス)諸島、ニューギニアで過ごす。

生息環境:

日本における繁殖地の90%以上が標高が500m以下の森林と水田が含まれる丘陵地や台地で、水田の90%が谷津田であった(東 2004)。つまり、低標高の谷津田のある里山が典型的な繁殖地の環境といえる。このほかに、樹林帯が発達した河川敷や湿地、あるいは山地帯でもまれに繁殖する。また、日本の越冬地には、繁殖地と同様、谷津田のある里山(西表島)のほかに、採草地やサトウキビ畑と防風林が混在している農耕地(石垣島や宮古島など)が利用される。

3. 生活史

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12月
繁殖システム:	越冬期	繁殖期	幼鳥独立	渡り								

一夫一妻で繁殖するが(Kojima 1987)、まれに2羽の雄が給餌に参加する一妻二夫もある(前澤 1990)。

巣:

営巣には、アカマツ、スギなどの針葉樹やクスギ、コナラ、スダジイなどの広葉樹が利用される。中でもアカマツの利用が最も多い。幹から横枝が張りだした樹幹部や幹の又上の部分に架巢する。大きさはハシトガラスの巣より一まわり大きく、樹木の枝を組み合わせて造られる。毎年同じ巣を使うこともある。巣の多くは水田などの開けた環境に面した斜面上の樹林に造られるが、河畔林や平地林でも造巢することがある。

卵:

4月下旬から5月上旬にかけて産卵する。クラッチサイズは2~4個で、3卵がもつとも多い(Kojima 1987)。

抱卵・育雛期間:

抱卵・抱雛はメスの役目で、1日のうち雄が1~3回短時間の交代をする。産卵から約1か月後の5月下旬から6月上旬にかけて孵化する。孵化から約35日前後が経過した6月下旬から7月上旬頃に巣立つ。巣立ち後2週目までは、営巣地周辺で親からの給餌を受け、巣立ち3週目に親から独立し、その後長距離移動を開始する(野中・長野 2006)。

渡り:

春、3月下旬から4月上旬頃、南からの暖かい季節風に乗って繁殖地に渡来する。一足先にオスが繁殖地へ到達し、なわばり防衛をしながらメスを待っていると考えられている。メスの到着後、求愛給餌、交尾、造巢が行われる。秋の渡りは9月下旬から10月中旬頃、群れをなして南下する。渡りの中継地では、数十から数百羽の鷹柱が観察される。

4. 食性と採食行動

水田や畑、伐開地などの開けた環境に接した樹木や電柱にとまり、シマヘビやニホンカナヘビなどの爬虫類、トノサマガエルやニホンアカガエルなどの両生類、トノサマバッタやアブラゼミ、ヤマユガの幼虫などを見つけて飛びかかり、足で捕らえる。その他にはハタネズミやヒメズなどの小型哺乳類やスズメやホオジロなどの小鳥類、アメリカザリガニやサワガニなどの甲殻類など、里山や水田周辺を主な生息地とする小動物が採食対象となる。

繁殖期のつがいのオスは1日の活動時間の約90%をとまり木にとまり、獲物を狙う採食活動に費やした。1か所のとまり木にとどまる時間は平均10分前後で、1日のうちに約60回程度とまり木を移動した。とまり木間を移動するために飛ぶ距離は1回に数メートルから数十メートルと短く、とまり木の90%以上が巣から500m以内に含まれた(東 2004)。つまり、給餌や移動のための飛行コストを低く抑えるため、巣から近いとまり木を頻繁に変えながら1回の飛行距離を短くする、探索待伏せ型の採食様式といえる。

谷津田のある里山では、渡来直後から育雛期初期にかけて水田周辺で主にカエル類を採食するが、育雛期中期から後期にかけて採食場所がしだいに雑木林に移行し(図1)、それとともに昆虫類の採食割合が高まる。このように、季節の進行とともに採食場所を変えながら、その時期に採食しやすい獲物を狩る。

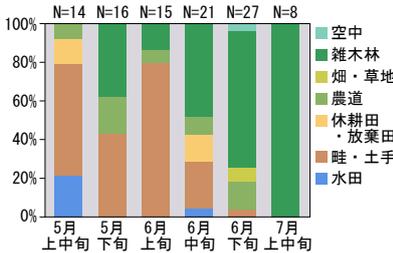


図1. 千葉県の里山におけるサシバの採食地点の環境の季節変化。東(2004)を一部改変。

4. 興味深い生態や行動、保護上の課題

● 繁殖北限域の分布の規定要因

日本における繁殖分布の北限は岩手、秋田両県とされているが、岩手県では盛岡以南であるのに対し、秋田県では盛岡よりも高緯度の能代付近である。太平洋側の岩手県で繁殖北限域が低緯度なのは、初夏に北東から吹きつける冷たい季節風「やませ」による気温の低下と、それがもたらす採食動物となる両生・爬虫類、昆虫類の発生時期の遅れと低い発生量ではないかと予想される。岩手県内の谷津田に生息するカエル類のなかで優占種であるトウキョウダルマガエルの発生動態をみると、サシバの繁殖密度が比較的高い北上圏内の谷津田は、繁殖未確認であった盛岡圏内のそれと比べ有意に発生量が多かった(図2;熊谷ら 2006)。今後、繁殖北限域における詳細な繁殖生態調査により、繁殖北限域の分布の規定要因が解明され、繁殖に必要な条件を抽出することが求められる。

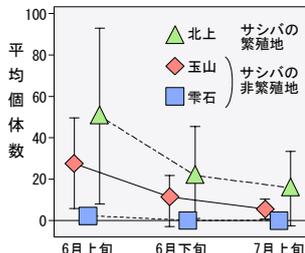


図2. 岩手県の里山におけるトウキョウダルマガエルの平均個体数推移。エラーバーは標準偏差を示す(熊谷ら 2006)。

● これ以上減らさないために

渡りの中継地における長年の通過個体数調査から、日本における生息数の急速な減少傾向が読み取れる。越冬地である東南アジア等の森林伐採や密猟だけでなく、繁殖地の開発もその原因である。繁殖地は谷地形で面積あたりの水田と森林の境界線が長いことが重要だと言われている(Matsuura et al. 2005, 百瀬ら 2005)。そのような場所は日本では谷津田として利用されているが、谷津田は稲の生産効率が低いため、圃場整備されるか、そうでなければ耕作放棄される場合が多い。そのどちらもがサシバの採食動物であるカエル類やヘビ類の減少や採食環境の悪化を招き繁殖地として適さなくなる。また、埼玉県ではサシバの繁殖地がオオタカのそれと置き換わることがみられており(内田博 私信)、このことから、同所的に生息する競合種との種間関係の把握も重要である。

サシバは2006年12月に絶滅危惧Ⅱ類の指定種となった。しかし、繁殖地の90%が民有地で、75%が鳥獣保護区などに指定されていないこともあり、具体的な保護対策はほとんどとられていない。そのなかで、愛知県豊田市による「サシバのすめる森づくり」基本計画(大畑ら 2006)は注目に値する。谷津田のある里山景観を有する豊田市自然観察の森では、民有地である休耕田の草刈りや水管理によって採食動物であるカエル類の生息場所の創設や、サシバの採食環境の整備を市が主体となって行っている。このような行政の係わりによって、日本各地で民有地を含めた地域の生態系全体の保全が図られ、行動圏が広いサシバなどの猛禽類の保護に結びつくことが期待される。

5. 引用・参考文献

東淳樹. 2004. サシバとその生息地の保全に関する地域生態学的研究. 我孫子市鳥の博物館調査研究報告第12巻:1-119.

del Hoyo, J., Elliott, A., and Sargatal, J. (eds.). 1994. Handbook of the Birds of the World. Vol. 2. New World Vultures to Guineafowl. Lynx Edicions, Barcelona.

小島幸彦. 1982. サシバ(*Butastur indicus*)のテリトリーとテリトリー行動. 鳥 30:117-147.

Kojima, Y. 1987. Breeding success of the Gray-faced Buzzard *Butastur indicus*. Jap. J. Ornithol. 36: 71-78.

Kojima, Y. 1999. Nest Site Characteristics of the Gray-faced Buzzard *Butastur indicus*. Jap. J. Ornithol. 48: 151-155.

熊谷徹・田原一平・東淳樹. 2006. 繁殖北限域におけるサシバの分布とその要因について —予備調査から見てきたこと—. 日本鳥学会2006年度大会講演要旨集:80.

前澤昭彦. 1990. サシバの複数雄をともなった繁殖例. Strix 9: 225-229.

Matsuura, T., Yokohari, M. & Azuma, A. 2005. Identification of potential habitats of gray-faced buzzard in yatsu landscapes by digital elevation models and digitized vegetation data. Landscape Urban Planning 70: 231-243.

百瀬浩・植田睦之・藤原宣夫・内山拓也・石坂健彦・森崎耕一・松江正彦. 2005. サシバ(*Butastur indicus*)の営巣場所数に影響する環境要因. ランドスケープ研究 68(5): 555-558.

森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男. 1995. 図鑑日本のワシタカ類. 文一総合出版, 東京.

野中純・長野大輔. 2006. 栃木県東部におけるサシバ(*Butastur indicus*)の繁殖成功率と巣立ち幼鳥の行動圏. 日本鳥学会2006年度大会講演要旨集: 79.

大畑孝二・手嶋洋子・橋本啓史・新妻靖章. 2006. 豊田市自然観察の森におけるサシバのすめる森づくりに関する活動. 野生生物保護学会第12回(沖縄)大会.

執筆者

東淳樹 岩手大学農学部 保全生物学研究室 講師



繁殖北限域となる岩手県でサシバの生態研究を再開しました。今度は学生さんと一緒に。北限域での研究を繁殖の制限要因の解明や生息地の保全につなげたいと思っています。

論文紹介

レミングが増えるとガンも増える？
～レミングとハクガンとシロフクロウ～

猛禽類の巣やカモメのコロニーの近くで繁殖し、彼らの巣防衛行動を利用して、自分の巣を防衛する鳥がいます。今、この行動についてイギリスの研究者と一緒に総説を書いています。集めた論文を半分ずつレビューしようということになって、報告書書きが佳境を迎え、野外調査もはじまる中、20本以上の論文を合い間をぬいながら読んでいました。こんなにたくさんの論文を真面目に読むのは久々でした。相方のQuinnさんも同じようなことを言っていて、英語を母国語にしている一流研究者でもそうなんだと、ちょっとほっとしました。でもそれに甘えず、これを機会に論文をたくさん読む習慣をつけたいと思います。できるかな？

さて、その中からちょっと面白いと思った論文を紹介しましょう。それはレミング(ネズミ)の増減とハクガンの繁殖、そしてシロフクロウとの関係についてまとめた論文です。

Béty, J., Gauthier, G., Giroux, J-F. & Korpimäkim, E. 2001. Are goose nesting success and lemming cycle linked? Interplay between nest density and predators. *Oikos* 93: 388-400.

教科書にも載っている有名な話ですがレミングの個体数は周期的に大きく増減します。レミングの多い年は、ホッキョクギツネはハクガンを狙わずにレミングを狙います。動物園などでガチョウに威嚇された経験がある方もいると思

いますが、ガン類の攻撃は人間でも思わず逃げようかと思うほどの迫力です。そんな怖いガンの巣を狙うよりは、無抵抗でたくさんいるレミングを襲う方がキツネも楽なのでしょう。さらにレミングが多い年にはシロフクロウもそこに繁殖にやってきます。シロフクロウの巣の近くで繁殖し、防衛行動に寄生することで、ホッキョクギツネだけでなくオオカミなどからも保護してもらえるのです。そのため、レミングの多い年にはハクガンの繁殖成功率は8割を超えるまでになります。

しかし、そんな幸せな日々は長くは続きません。レミングの多い年の後には、すぐにレミングが少ない年がやってきます。レミングが減ると移動能力のあるシロフクロウはよりよい繁殖地を求めてその場所を去ってしまいます。ハクガンはシロフクロウの庇護を受けることはできなくなります。さらにレミングを獲ることができなくなったホッキョクギツネがハクガンの卵やヒナを狙うようになります。そして、繁殖成功率は2割程度にまで低下してしまうそうです。ハクガンも移動能力があるのだから、シロフクロウと同じように移動してしまえばよいように思いますが、きっと食物の問題などでそういうわけにもいかないのでしょうね。

そういえば、日本野鳥の会東京支部の探鳥会のデータを解析していた神山さんが、ヒドリガモがどの探鳥地でも多い年が時々あると言っていました。これもレミングのサイクルによる繁殖成績の増加が原因だったりして…。【植田睦之】



ハクガン。[Photo by 谷英雄]

研究誌 Bird Research より

菊地さんと佐野さんによるカンムリワシの竹富島での観察記録がBird Researchに受理されましたのでご紹介いたします。

菊地正太郎・佐野清貴. 2007. 竹富島におけるカンムリワシの観察記録. *Bird Research* 3: S7-S10

カンムリワシは、日本では石垣島と西表島でのみ繁殖する猛禽類で、この2島以外ではほとんど観察記録がないのですが、この2島のあいだに位置する竹富島でのカンムリワシを観察した記録の短報です。

ばくも以前カンムリワシの生息環境について調査したこと

があるのですが、ちょうど本州のサシバのように水田と樹林の両方がある場所に生息しています。この2島に現存するこのような生息環境は極めて少ない状況です。そのため、カンムリワシにとって、繁殖できるほどではなくても、一時的に滞留して繁殖地が空くのを待ったための場所は大切なのではないかと思います。2島以外の鳥の生息状況はあまり調べられていないので、このような観察記録が蓄積されていくことが、カンムリワシの保護に役に立つのではないかと思います。【植田睦之】



図1. 竹富島で撮影されたカンムリワシ。

バードリサーチニュース 2007年5月号 Vol.4 No.5

2007年 5月 15日発行

発行元: 特定非営利活動法人 バードリサーチ

〒191-0032 東京都日野市三沢1-26-9 森美荘 II-202

TEL & FAX 042-594-7379

E-mail: br@bird-research.jp

URL: <http://www.bird-research.jp>

発行者: 植田睦之

編集者: 高木憲太郎